

岡山県生涯学習センター機能強化基本計画等検討委員会第2回会議 議事概要

日時 平成23年6月1日(水)
14:40~16:00

場所 ライフパーク倉敷 視聴覚ホール

1 開会

2 議事

- (1) 未来科学棟(仮称)の基本的な役割について
- (2) 未来科学棟(仮称)の基本的な機能について
- (3) 未来科学棟(仮称)の基本的な運営方針・管理方針について
- (4) その他

3 閉会

< 議事概要 >

未来科学棟(仮称)の基本的な役割

事務局から説明

委員	参考資料にある科学館の規模は、旧県立児童会館と比べるとどうなのか。
事務局	出雲科学館については、旧県立児童会館よりも圧倒的に広い。倉敷科学センターも展示フロアの広さだけで、旧県立児童会館同等以上の面積がある。このように、参考資料にある4つの科学館全てが、旧県立児童会館よりも広い。
委員	目的のところ、科学を子どもたちに教えて、喜ばせればそれでよいのかという問題がある。その後のことを考えて、理念のところに入れておかないとそこで終わってしまう可能性が大きい。興味を持たせるような段階は必要だと思うが、その人たちの何人かが、理科系に進んで、将来その分野で開拓して、産業でも何でもいいが、再生産していくような社会のシステムを我々としては望んでいる。そういう意味で、すぐに出来なくてもいいので、展示物であったり、触らせたり、次の段階を子どもたちに見せることが必要だ。家族と共に学ぶということはもちろん大切だが、子どもたちにとっては、こういうことをやるとおもしろい、不思議だと思い、その次にそれを理解するためには、もう少し勉強したいというような、上へのつながり、挑戦を意識させるような施設にしてほしい。
事務局	これから策定していく基本計画の中に、お話のようなストーリーを描いていく必要があると考える。科学館が、感動、興味から気付きを起こし、そこから理解・習得をして、実践につながっていく流れをつくっていく必要がある。例えば、高校生が主体的に関わっていくことによって、上の世代の子どもが下の世代の子どもに教えていく。あるいは、自分の近い将来を見ながら、科学を通じて、大学・高専・企業等と関わっていく中で、将来を考えていくきっかけとなるようなつながりについて、計画に盛り込んでいきたいと考えている。

未来科学棟（仮称）の基本的な機能

事務局から説明

- 委員 ウォールギャラリーについて、掲示するものを作成するのは学校でもできるが、その内容を企画する優秀なコーディネーターが必要だ。科学体験・交流広場については、学年によって興味がわくテーマが違うので、学年・人数・時間を事前に聞くことで、多様なプログラムを調整できるスタッフがいればよいと思う。それと、バスの駐車場と昼食を摂る場所、特に、雨天のときのことが問題となる。生涯学習センターにそういった場所があるのかどうかだが、未来科学棟の使っていないスペースも活用できれば、見学コースに入れてもらえるのではと感じる。
- 事務局 どういったものを展示していくかについては、しっかりと考えていく必要がある。団体利用を考えたときに、駐車場と昼食の場所は、大きな課題であると認識している。駐車場の増設・確保について、既存の施設、周辺施設の有効活用も含めて検討していきたい。テーマについては、本日欠席の委員から、「各校の規模や時間等でプログラムを作成してくだされば利用しやすい」との意見を頂いている。学校規模・学級数・時間等を踏まえて、いくつかのメニューを用意し、適切に学年に応じたプログラムを提供していかなければならないと考えている。他館の状況を研究しながら、この場でどういう内容が出来るかを検討していきたい。他の課題として、「駐車スペースやトイレの確保が十分か」「多くの機関との連携、応募校の調整等かなりの労力が必要」といった御指摘も頂いた。もうお一方の委員からは、「未来につながる科学の学び・体験・交流の発信拠点というコンセプトを掲げているが、未来という面をしっかりと打ち出してほしいということで、人づくりや何のために生きるのかを、大人と子どもの触れ合いの中から気付く未来共創の場所であってほしい」という御意見。また、「岡山の地域特性については、世界あるいは全国に誇る岡山の地域特性をいかにこの中で具現化していくか」という御指摘を頂いた。この施設において、岡山ならではのものを産学官民の協働で発揮していければと考え、基本計画の中にはそういった御指摘も踏まえながら、記述を加えていきたい。
- 委員 旧児童会館には、小学校2年生以下の低学年が、池田動物園と太陽の丘を合わせたかたちで来ていた。雨が降ったときには、生涯学習センターの交流棟で昼食を食べていた。また、少しぐらいの雨なら、2階の通路の下で食べていたので、スペースは十分ある。トイレについても、交流棟及び児童会館の外と中にあり、十分だ。事業の内容を企画していく人がいるかということについては、この構想からみれば、産学官民で連携を図っていくのだから、そういったところからの意見も取り入れながらプログラムをつくっていけば、やっていけるのかなと思う。交流棟2階の学習相談員のコーナーのパソコンを使えば、一般の人たちへ情報発信出来るのではないかなと思う。
- 委員 プラネタリウムは、宇宙科学だけという視点ではなく、非常に狭い施設なので、うまく工夫して、幅広くできることがあるのではないか。解説はぜひライブでしてほしい。

- 事務局 プラネタリウムと全天周映像を組み合わせしていくことを考えているが、他県の例では、宇宙以外にも科学を学ぶことができるコンテンツがあり、そういったものも考えていきたい。
- 委員 方向性として、幅広い世代の体験・交流や子ども以外の世代も楽しむことができる施設を目指すのであれば、ソフトの部分をもう少し具体的に考えていく必要がある。
- 事務局 運営管理方針を考えていく際、平日に、一般の方々に利用していただくのは難しいので、学校利用が中心になる。そのときに、幼稚園・小中学生が主としたターゲットになるが、高校・大学の研究発表の場としての活用も十分考えられる。全体の年間計画を考えていく中で、高校生にも積極的に活用いただきたいと思う。休日・夏休みには、一般の方々、親子、世代を超えて来ていただき、何かをいっしょにつくりながら、体験しながら、学んで、交流できるプログラムを検討していきたい。1階・2階のいずれにしても、固定的なものを置くのではなく、そこに人が介在して、親子で、あるいは、世代を超えて学ぶためのプログラムを提供していく場としていければと思う。
- 委員 生涯学習センターの一部であるので、施設の目的を子どもが集まりやすいということだけにしないでほしい。中学生・高校生は忙しくて来ることができないのだが、潜在的には学びたいという意欲がある。最近、科学オリンピックに関わっていて感じるのだが、家庭環境の恵まれた子どもが浮かび上がってくる。みんなにそういった環境を期待することが出来ない中、科学に興味があって、少しでも話を聞きたいという子どもがいると思うので、各地方にちょっとした科学拠点をつくってほしい。そこでは、中学生・高校生が、興味を持ったり、わからないことがあって学校では聞けないようなときに、メールでも実際に訪れてでもよいが、対応できる場所、そういう子どもたちをうまく拾い上げて、将来花を開くような場所があればいいと思う。
- 委員 これまでの議論を聞いてきて、私もぜひそのようになってほしいと思うが、理想がかなり高いところにあるように感じる。高い理想を実現するためには、最終的には、人材に行き着いてしまう。不思議だとかおもしろいという感動の次に、それを説明するためには、実力がなければならない。そういう人材を見つけなければならない。どういうものをつくるかというのは、結局、模索して、試行錯誤して、失敗を繰り返して、最終的に花開くことを考えつかなければならないのだが、この段階では難しいところがある。そういうものは、実は、これから探して行って、優秀な人材を集めてそうした人たちに預けて、がんばってやってくださいというのが、成功するやり方だと思う。そうすると、運営の方針に行き着いてしまうのだが、そういう人材をどうするかたちで集めるのか、きちんと覚悟を決めない限り、絵に描いた餅に終わるのではないかと心配しており、非常に遥かなものを感じる。科学館の将来計画をどうするかというのは、どういう人をどれだけとるかということと同義語に感じる。
- 委員 これまで資料を見てくると、これからやることが、全て子どものためにという感

覚になってしまうが、あくまで生涯学習センターの一部として整備するという
ことを、十分理解すべきだと思う。そういう中で、いろいろなプラネタリウムに
行ってきたのだが、県立は少ない。ほとんどが市立だ。大阪市立科学館は、大き
なプラネタリウムがあるが、学芸員が5, 6人いて、子どもに語り掛けながら解
説する。2時間おきの番組のうち、キッズ向けは2回だけで、残りは全部大人向
けのものだ。その中に天体があるのと、「銀河鉄道の夜」といった番組を見せてく
れる。池袋にあるサンシャインシティのプラネタリウムでも、キッズ向けは1日
2回で、残りは大人向けの時間となっている。プラネタリウムをフルにやるんだ
ったら、大人でも十分鑑賞できるようなものも考えておかないと、子ども用ばか
りだとよくないのではないかという感じがした。せっかく立派な機械を入れるの
なら、そういうことも考えてほしいと思う。

委員
委員

平日の午前中の時間帯を一般の大人で埋めることは、岡山では可能か。
東京のあるプラネタリウムでは、9時に行くとするに20人くらいの行列が出来
ていた。入ると大人向けの時間で、星空の天体映像があって、星座を示す映像を
消したりつけたり自由に出来る。岡山でそういった大人向けのものが出来るかは、
今後の人気次第ではないか。本当におもしろいものなら来るだろう。また、大人
が見るに耐えるだけのソフトがどれくらいあるのかわからないが、どの館に行っ
ても、制作会社は一つだった。

事務局

最近の傾向として、東京や大阪では都市型のプラネタリウムが人気を博していて、
平日の大人の憩いの場としてのコンセプトを持って、平日の夕方、仕事帰りに、
癒しの空間として利用されている。駅の目の前にあるなど立地も条件の一つであ
るが、「はやぶさ」の人気もあって、利用が多い状況にある。平日の日中にどれだ
けの利用があるかは課題であるが、少なくとも子どもだけとは考えておらず、子
ども向けと大人向けをどう組み合わせれば、利用者ニーズにあったかたちになるの
か研究していきたい。

未来科学棟（仮称）の基本的な運営方針・管理方針

事務局から説明

委員

前回の会議が新聞に掲載されたのをある学校の教員が見て、興味があるのでぜひ
ボランティアとして参加したいと言っている。高等学校の地学は、入試科目とし
て選択しないが、専攻した教員はたくさんいて、天体、岩石のことなど、地学に
ついて教えたいという思いを持っている。この方は、小学生を対象にして、天体
望遠鏡の作り方などを教えている。学習だけして帰って来るのではなく、何かを
作って、家でまた使うということであれば広がりが出てくるのではないか。もの
を作っていくことになれば、そこに保護者とかいろいろな人が関わってくるので、
かなり幅広い層が集まるのではないか。新聞の力というのは大きいと思ったが、
教えたい人はたくさんいるので、こういうことをやるんだというこの計画を発信
して、公募すればよいのではないか。平日は、学校の授業があるが、夏休みなど
で活用すればよいのではないか。

委員 プロデュースセンターが大事になってくると思うが、具体的にどういう考えを持っているのか。

事務局 関係機関との連携・協働を進めていく上で、ネットワークを結び付けるのがプロデュースセンターの役割の一つだ。事業を企画・運営していくに当たって、どのような事業を実施するかを検討していく組織となるとともに、連携・協働の下で、例えば、それぞれの企業、大学で何が出来るか、お互いの資源を出し合って、年間計画の中で、具体的な事業の実施につなげていくような組織が出来ればと考えている。ただ、プロデュースセンターはあくまで代表であって、その代表だけでやっていくというよりは、ここで示された方向性に基づいて、大学、企業をつないでいったりということころは、県がしっかりと主体性を持って役割を發揮していかなければならないと考えている。実力ある人材を組織化して、そこへ任せたらとの御指摘があったが、県としては、この基本計画を策定した後、このプロデュースセンターを組織化していくことを速やかに進めていきたいと考えている。ということが本当に出来るのか、それぞれの立場で協力できる分野があり、早めに把握・分析し、協力体制を築いていきたい。どのような人材を確保するかについては、第1回の会議でも、その必要性を御指摘いただいた。全体の事業を総合的に企画、マネジメントできるような人材、学校における理科学習に対応したプログラムを企画・実施できるような人材、展示体験の学習指導が行える人材、サイエンスドーム関連のコンテンツ製作、解説等の分野に長けた人材など、専門的な要素が必要になる部分が多くあり、どういう人材が必要なのかを整理した上で、どう確保していくかを検討していきたい。専門的な人材を県で確保していくこともさることながら、ボランティアというかたちで、これまで理科教育等に関わった方々にも参画いただきながら、体制を整備していくことも考えていく必要がある。

委員 具体的な事業について、休みの日は、実施しやすいと思うが、平日をどうするかだ。何年も続いていくようなしっかりとした構想が必要だ。

委員 私のイメージでは、コーディネーターは多くなくてよいと思う。ボランティアとなる人材は、登録しておいて、何人かのコーディネーターがコーディネートしていくかたちになる。科学Tryアングル岡山では、「科学で岡山を元気にしよう」をキャッチフレーズに、岡山大学、岡山理科大学、倉敷芸術科学大学、津山高等専門学校、県がタイアップしている事業だが、3月で補助金が終わってしまった。細々とでもいいから、各大学の持ち出しで続けていこうということで、「科学大好き岡山クラブ」に取り組んでいる。そういったものをうまく利用して、アレンジすれば可能ではないか。そこで活躍しているNPOもある。全部を未来科学棟の職員でやるのは無理だ。それでもやはり、目配りの出来るコーディネーターは必要であるし、事業がどう展開していくかはその人の力量によるところが大きい。

事務局 岡山には、様々な科学に関する知が広がっているという前提に立ち、そういった知をつなげていって、この館を拠点にしていくというようなイメージだ。ゼロから、何もかもをやっていくということは考えていない。そういった意味で、科学

Tryアングル岡山の取組も注目しているし、様々な科学に関する取組をうまくつなげてアレンジしていく中で、連携・協働が進んでいけばと考えている。県立の生涯学習センターと一体となっている科学館で言えば、群馬県が同じスタイルをとっており、ここでは、サイエンスインストラクターの会を立ち上げ、おもしろ科学教室の運営に関する事業等を行うため、多くは教育関係者であるが、全部で283名が登録している。また、地域の方々を招いて、科学の実験教室等の中で指導者を養成し、指導者となった方が、地域の公民館などで、子どもたちや住民のための科学の教室を開いていくような広がりもあるようだ。いずれにしても、県広域に発信していくために、こういった仕組みも参考にしながら、体制を整備していく必要がある。

委員 サイエンスインストラクターの会は、小学校、中学校の教員がほとんどのように見えるがそのあたりはどうか。

事務局 実態としては、そのようになっている。本県で、人材バンクを考える場合には、企業で科学やものづくりに携わった方々が、退職後、地域の一員として活躍されることもあるだろうし、大学関係者の場合もあるので、必ずしも小中学校の教員に限定していくものにはならないのではないかと考えている。

委員 実際には、どれくらいの時間を活動に割いているのか。

事務局 年間120から130の科学教室を、県生涯学習センターで10回程度、それ以外でも、全県で実施している。基本的には、協定先の公民館等とすり合わせをした上で年間計画を立て、その地域のインストラクターが中心となって関わっている。内容によって、必要があれば、県の職員が派遣されている。地域のみでなく、県生涯学習センター、周辺のインストラクターもサポートとして協力している。